

「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を 育むための地理歴史科の授業づくり

— 単元の見通しを表現・修正する活動を通して —

榊原 秀允¹

情報化社会の進展により、情報や知識を活用し、新たな価値につなげていく人材が求められている。そこで本研究では、「思考力・判断力・表現力等」の育成に着目し、授業で得た情報や知識を基に、生徒が「単元の見通しを表現・修正する活動」を行い、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育む授業を実践した。その結果、歴史的な見方・考え方を働かせ、情報や知識を活用する生徒の姿を確認することができた。

はじめに

国立教育政策研究所による学習到達度調査(PISA 2018)の結果の分析では、日本の生徒は「自由記述形式の問題において、自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明することに、引き続き、課題がある。」(国立教育政策研究所 2019)と指摘されている。

さらに、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説地理歴史編』(以下、『解説地理歴史編』という)によると、情報化やグローバル化の進展により、簡単に情報が入手できる社会において、学校教育には「情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと」(文部科学省 2019a p.1)をできるようにすることが求められている。

また、所属校の現状として、定期考査の文章問題や、授業における論述課題に対して苦手意識をもち、情報や知識を十分に活用できていない生徒が見受けられた。

これらのことから、得た情報や知識を活用し、新たな考えをもち、根拠を示して説明する力を生徒に育成する必要がある。この力を、地理歴史科で育む力である「歴史的思考力」に関連付けると、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」に該当する(池尻他 2012)。

以上より、本研究では地理歴史科の授業において、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育むための学習指導の在り方を明らかにし、その効果を検証した。

研究の目的

本研究では、地理歴史科において「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育む単元計画を開発し、授業実践を通してその有効性を検証することを目指す。

研究の内容

1 「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」とは

地理歴史科で育む力としての「歴史的思考力」は1956年高校世界史の学習指導要領の目標から登場した。それ以降、国内外の多くの研究者によって、定義付けや育成法の研究が行われてきた。池尻らはこれらの先行研究を概括し、歴史的思考力を5種類に分類した(池尻他 2012)。

しかし、この「歴史的思考力」という表現は平成30年に告示された新学習指導要領において見られなくなった。これはすべての教科において、育成すべき資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理したためであると考えられる。そこで、臼井、石上は池尻らが示した歴史的思考力の5分類を新学習指導要領の考えに基づき捉え直している(第1表)。

第1表 歴史的思考力と新学習指導要領対応表

新学習指導要領 三つの柱	池尻らが分類した 歴史的思考力
知識及び技能	資料を批判的に読む力
	歴史的文脈を理解する力
思考力、判断力、 表現力等	歴史的な変化を因果的に理由付ける力
	歴史的解釈を批判的に分析する力
学びに向かう力、 人間性等	歴史を現代に転移させる力

(臼井他 2018 を基に作成)

本研究で生徒に育ませたい「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」について、臼井らは新学習指導要領の文言を用い、「歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察する力」(臼井他 2018)と定義した。そし

1 神奈川県立秦野曾屋高等学校
研究分野(授業改善推進研究 地理歴史)

て、『解説地理歴史編』には「時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどは、社会的事象の歴史的な見方・考え方に沿った視点の例」(文部科学省 2019a p.194)と示されている。このことから、本研究では「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を資料から得た情報や授業で学んだ知識を歴史的な見方・考え方を働かせながら活用し、事象の意味や意義等を考察する活動を行うことで育まれる力であると整理した。

2 研究の構想

(1) 単元の見通しを表現する活動

「新学習指導要領」において設置される「日本史探究」では、生徒が「時代を通観する問い」を表現できるよう指導することが求められている。この「時代を通観する問い」について、『解説地理歴史編』では「時代の転換の理解を踏まえて、その後の時代の特色と歴史の展開との関係の考察に向かうための学習の見通しを表した問い」(文部科学省 2019a p.197)と説明している。さらに、「歴史総合」や「世界史探究」においても、生徒が表現した問いを以後の「学習内容への課題意識につながるよう」(文部科学省 2019a p.141)にしていくことや「表現した問いについて予想や仮説を考案するなどして解決の見通しをもたせ」(文部科学省 2019a p.291)ることを求めている。

このように、問いを表現する活動は後の学習事項との関わりや展開を意識した上での表現が必要とされる。すなわち、生徒が学習の見通しをもって、授業に取り組んでいく必要があると考えられる。

しかし、高校生に歴史のイメージを訊くと「暗記するもの」という回答がほとんどである(皆川 2019)。「歴史=暗記」というイメージでは受動的な学習態度から抜け出せず、見通しをもつことはできないであろう。ましてや問いを表現することはなお困難であると考えられる。

そこで本研究では、教員が「学習の見通しを表した問い」を生徒に提示し、その問いについて、生徒が予想や仮説を表現し、取り組んでいく活動を行うこととした。予想や仮説を表現するためには、授業で示される情報や既習事項などを活用し、歴史の展開やつながり等に注目する必要がある。そのため、生徒は情報や知識を活用し、歴史的な見方・考え方を働かせる、と考えられる。

なお、本研究では、「学習の見通しを表した問い」を「単元の見通し」、「単元の見通し」に対する「予想や仮説」を「単元の見通し」と定義付けることとする。

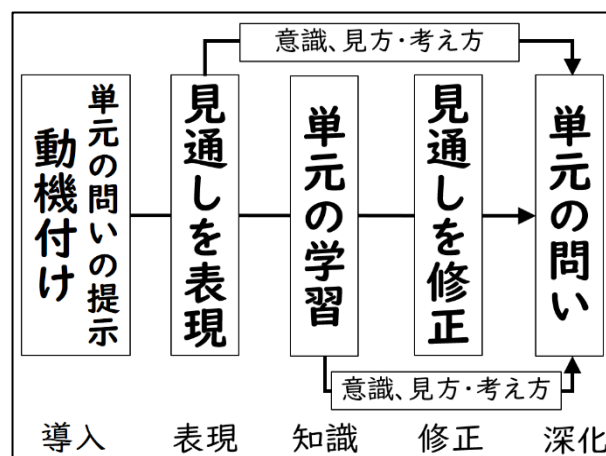
(2) 単元の見通しを修正する活動

『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編』は「生徒が学習している事項について、事前に見通しを立てたり、事後に振り返ったりすることで学習

内容の確実な定着が図られ、各教科等で目指す資質・能力の育成にも資するものと考えられる。」(文部科学省 2019b)と示している。「社会科、地理歴史科、公民科の指導におけるICTの活用について」では、「児童生徒が、自ら問題意識をもち、問題解決の見通しを立て、必要な情報を収集し、情報を読み取り、情報を分類・整理してまとめたりする学習活動の構成が大切。」(文部科学省 2020)と示されている。以上の資料において、生徒が学習活動を振り返ることや学習活動の中で情報を分類・整理することの重要性が示されている。このことから、生徒が表現した「単元の見通し」を、学習を進める中で生徒自ら修正していくことも重要であると考えられる。

(3) 単元の見通しを表現・修正する活動

そこで、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育むための手立てとして、「単元の見通しを表現・修正する活動」を構想し、単元の計画を以下のように考えた(第1図)。



第1図 単元を表現・修正する活動構想図

まず、生徒に単元で学習する事項について問題意識をもたせるために動機付けを行い、「単元の見通し」を提示する。次に、その問いについて、生徒が「単元の見通し」を表現する。

生徒が単元の始めに「単元の見通し」を表現することは、学習する内容を生徒に意識させる効果が期待できる。これにより、資料の読み取りで得た情報や授業で教員の説明から得た知識など、単元の学習事項を「単元の見通し」に関連付けようとする意識が生徒の中に育まれることが見込める。また、学習事項を「単元の見通し」に関連付けるためには、事象の推移、比較、相互のつながりなどの歴史的な見方・考え方を働かせることが必要となると考えられる。

さらに、生徒が単元の始めに表現した「単元の見通し」は、授業で学んだ知識により修正が施され、より精練されたものになっていく。これにより、単元の学習事項がつながっている、ということを生徒に気付かせることができると考えられる。

このように、「単元の見通しを表現・修正する活動」

は、知識から新たなことを考え、導き出し、歴史的な見方・考え方を働かせる活動となるため、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育むことに有効であると考えられる。

3 研究仮説

以上のことから、本研究では次のように仮説を立て、検証を行った。

「単元の見通しを表現・修正する活動」は、単元を通して歴史的な見方・考え方を働かせ、情報や知識を活用するため、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育むために有効である。

4 検証方法

検証授業を実施し、次に挙げる2点から生徒の変容を読み取り、仮説を検証する。

(1) 事前・事後アンケート(4件法)

検証授業の事前、事後に生徒対象アンケートを行い、選択式の項目における回答の割合の変化を分析し、考察した。項目は、市川伸一『学ぶ意欲の心理学』の「学習動機を測定する質問項目」を参考にした。

(2) 生徒の記述と成果物

記述式アンケート、各授業後に実施した振り返りシートの記述と授業で作成した成果物から、生徒に「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育むことができたかを分析、考察した。

5 検証授業

(1) 概要

【実施期間】 令和2年10月5日(月)～12日(月)
 【対象】 所属校 第2学年2クラス(78名)
 【科目】 日本史B
 【授業時数】 50分授業×5回
 【単元名】 地方政治の展開と武士

(2) 本授業で用いる問い

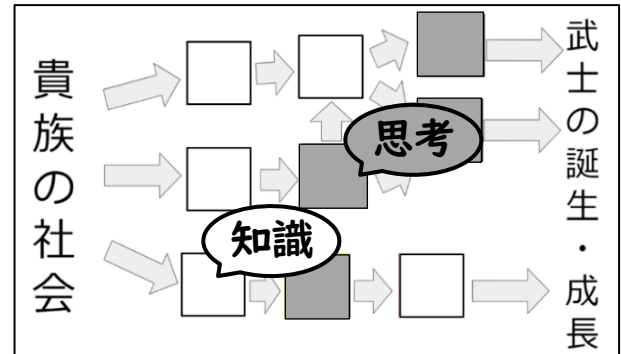
ア 単元の問い

本単元において、生徒は武士がどのように誕生し、成長していったかを学習する。生徒が諸資料から得た情報や授業での学習を通して「単元の見通し」を表現・修正していくための問いとして、「単元の問い」を設定した。授業では生徒がこの問いに対して考察を加えながら、「単元の見通し」を表現・修正していく。

【単元の問い】
 摂関政治が全盛期を迎えるなか、どのように武士は勢力を伸ばしたのだろうか？

今回の実践では、見通しの修正を容易に行えること、情報や知識を活用する過程を可視化すること、をねらいとして、模造紙と付箋を用いて6人組グループワークで「単元の見通しを表現・修正する活動」を進めて

いくこととした。その際、資料や既習事項を用いて得た情報・知識はピンクの付箋に、情報・知識を活用して、今後の展開を推測、考察するなど、思考の結果によるものは黄色の付箋に書くように指示した(第2図)。



第2図 模造紙に表現した単元の見通し

イ 見方・考え方を働かせる問い

「単元の見通しを表現・修正する活動」を通して生徒がどう変容したかを見取る問いとして「見方・考え方を働かせる問い」を設定した。この問いへの記述内容を分析することで、生徒が本単元で学習した情報や知識を歴史的な見方・考え方に基づいて活用しているかを見取ることができると考えた。

【見方・考え方を働かせる問い】
 あなたは政権が移り変わるきっかけは何だと思いますか？

現代の日本では選挙を基にした政治運営が行われていることから、平安～鎌倉時代の政治運営とは大きく異なる。そのため、政権の移り変わりを一概にまとめることはできない。しかし、池尻らによると歴史の授業で形成された認識から現代を見つめることは、歴史教育において求められている力でもあることから、上記のような問いを設定した(池尻他 2012)。

ウ 本時の問い

各授業においても、推移や事象相互のつながり等の見方・考え方を働かせ、情報や知識を活用する「本時の問い」を設定した。「本時の問い」は「単元の問い」の解決に向け、各時間で学んだ知識を定着させるための問いとなるように設定した。また、「本時の問い」の理解が「単元の問い」の解決につながることを意識させるために、武士の誕生から成長に関する内容となる

第2表 本時の問い

時	本時の問い
1	摂関政治期の資料から武士の誕生を考えよう
2	国司の権限強化は武士の誕生とどのような関係があるのだろうか
3	寄進地系荘園の誕生は武士の誕生とどのような関係があるのだろうか
4	武士団はどのように形成され、力をつけていったのだろうか
5時間目は「単元の問い」と「見方・考え方を働かせる問い」を考察	

ように工夫した(第2表)。

(3) 各場面の授業内容と学習活動

ア 第1時

第1時は、生徒に「単元の問い」、「見方・考え方を働かせる問い」を把握させ、「単元の問い」に対して「単元の見通し」を表現させる時間とした。

まず、導入において生徒に政権交代について関心をもたせるための動機付けとして、1999年と2009年の政権交代のニュース映像を視聴させた。「見方・考え方を働かせる問い」である「なぜ政権が移り変わるのか」について考察を行わせ、単元の終わりに改めてこの問いについて考察を行うことを示した。

次に、既習事項や中学校の学習事項を活用し、平安時代から鎌倉時代に移り変わる間に武士が誕生し、勢力が増していることを確認させた。その上で、竹取物語絵巻から、摂関政治期に武士がすでに存在していることを認識させ、「単元の問い」を示した。さらに、摂関政治期の資料の現代語訳を配付し、「単元の問い」に対する「単元の見通し」を付箋を用い、模造紙に表現させた。

最後に、次回の授業以降も本時で使用した模造紙に付箋を追加しながら「単元の見通し」を表現・修正していく、ということを説明した。

イ 第2時～4時

第2時から第4時までは、授業前半に「本時の問い」についての授業を行った。律令体制の行き詰まりから生じる歴史的事象についての学習を通じて、武士の誕生・成長に関する考察を行わせた。

授業後半は、授業で学んだことや学んだことから推測できることを付箋にまとめさせ、第1時で使用した模造紙を用い、「単元の見通しを表現・修正する活動」を行わせた。

ウ 第5時

第5時は、「単元の問い」と「見方・考え方を働かせる問い」の考察をさせる、まとめの時間と位置づけた。

「単元の問い」への考察では、前時まで使用していた模造紙の付箋を基に文章を作成させた。グループで模造紙の見直しと、意見交換を行わせた上で、個人の考察をワークシートに記述させた。

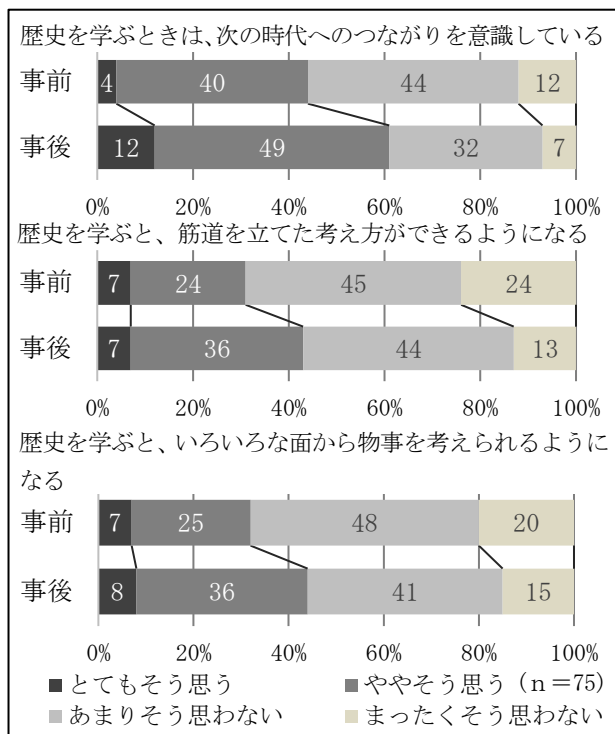
「見方・考え方を働かせる問い」への考察では、単元の学習事項を活用し、現代の政権交代について再考察させた。1999年と2009年の政権交代に関する教科書の読み取りをグループで行わせ、単元で学習した事項を用いながら、自らの考えを記述させた。

6 検証結果と考察

(1) 生徒が歴史的な見方・考え方を働かせているか

本実践を通して、事後アンケート結果では「次の時代へのつながり」、「筋道を立てた考え方」、「いろいろな面から物事を考えられる」の項目について変化が見

られた。これらの項目は歴史的な見方・考え方に沿った視点の例として、『解説地理歴史編』に示されている「推移」や「比較」、「事象相互のつながり」に関わる事項と捉えられる。資料から得た情報や授業で学んだ知識を活用し、「単元の見通しを表現・修正する活動」を行ってきた本実践では、情報や知識を「単元の問い」に関連付けようとする意識が生徒に働くと考えられるため、「次の時代へのつながり」や「筋道を立てた考え方」に生徒が着目したと考えられる。また、本単元では武士の誕生から成長についての学習でもあったことから、中央政治と地方政治の関連や比較を通して考察を加えることが多く、「いろいろな面から物事を考えられる」項目の数値の上昇につながったと考えられる。これらの結果から、「単元の見通しを表現・修正する活動」は、生徒に歴史的な見方・考え方を働かせる、ということに一定の成果があったと考えられる(第3図)。



第3図 見方・考え方の視点に係るアンケート結果

一方で、第3図が示すように、授業後も多くの生徒が歴史的な見方・考え方に沿った視点に着目できなかったことは本実践の反省として捉える必要がある。

(2) 生徒が情報や知識を活用できているか

ア 模造紙に表現した「単元の見通し」の分析

第1時では、武士の誕生から成長までを矢印でつなげるような見通しを表現したグループは出なかった。しかし、地方の民が苦しい暮らしをしていることや都に税が集まっていない様子を資料から読み取り、戦いが起きることを推測したグループが8グループ(全12グループ)見られた。

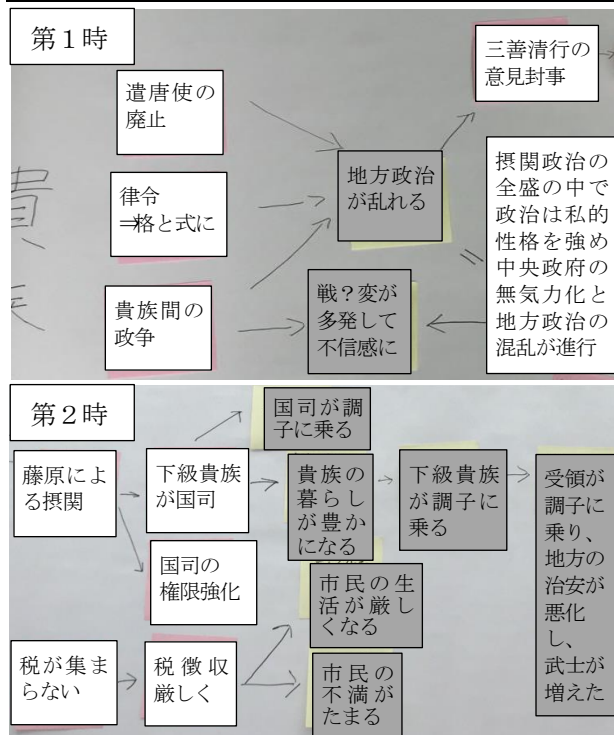
第2時以降の活動では、国司の権限強化や寄進地系荘園の誕生など都や地方の様子を具体的にイメージできる学習を進めたため、付箋の量が増え、武士の誕

生から成長へと生徒が見通しをもって知識を活用しようとしている様子が確認できた。

グループAは、第1時の資料の読み取りから、中央政治の乱れにより戦いが起こることは見通していたが、資料から得た情報を活用できず、矢印でうまく付箋をつなぐことができなかつた。しかし、授業2回目で国司について学んだところ、地方の様子を具体的にイメージできたため、資料の情報を活用し、見通しをより鮮明に描けている様子が見て取れた(第3表)(第4図)。

第3表 グループAの付箋量の変化

	1回目	2回目	3回目	4回目
ピンク(情報・知識)	6	11	17	23
黄(思考)	2	8	14	14



第4図 グループA模造紙 (表記は原文のまま)

第2時で思考を示す付箋が4倍に増加していることは「単元の問い」を解決するため、学習事項を活用しようとしている生徒の姿を表していると考えられる。このことから、単元を見通す活動は、資料から得た情報や学習した知識を活用し、関連付けようとする意識を生徒に育むことに効果的であったことを確認できた。

イ 生徒の振り返りの記述内容

授業ごとに行った振り返りの記述からは、既習事項や新たに得た知識を関連させ、武士の誕生から成長への見通しを表現しようと試行錯誤している生徒の姿を以下のように見ることができた。

- ・前回やった部分と結びつけて考えられる部分があったのが良かった。
- ・武士につなげるにはどのようにすればいいのか考えるのが難しかった。
- ・武士の発生の一連の流れが大まかだけど分かった。

授業ごとの振り返り記述欄に「武士の誕生から成長

までの過程がつながってきた、わかってきた」という記述をした生徒が、1回目0人、2回目6人、3回目11人、4回目20人と増加しており、「単元の見通し」を修正する活動により、学習事項がつながっていることを意識できていることが分かる。

また、授業全体の振り返りの記述からは、知識が構造化されていることや、知識を活用し、時代の特色についての考察を行っている生徒の様子を以下のように見取ることができた。

- ・武士のことについて詳しく知れて、その時の時代背景を詳しく知ることができてよかった。
- ・毎日一つずつ少しずつ、問いに対しての答えが見つかっていくので、いつもの聞いているだけの授業とは違い新鮮で楽しかったしおもしろかった。
- ・学んだことや、感じたこと、予測したことを付箋で模造紙に貼っていくことですごく頭の中で整理されたり、自分の考えを班員に分かりやすく伝えたり、など色々と積極的に行うことができてよかった。

武士の誕生という歴史的事実だけでなく、なぜ誕生したのか、どのように成長したのかという意味や意義の考察にまで思考が及んでいる様子が見て取れた。さらに、「単元の問い」への見通しをもつことにより、「本時の問い」の重要性も高まっていたことが考えられる。

(3) 生徒に「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育むことができたか

アンケートの数値が事前と事後で変化したことや生徒の記述と成果物から、生徒が歴史的な見方・考え方を働かせながら、情報や知識を活用する姿を見取ることができた。これにより、「単元の見通しを表現・修正する活動」は、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を育むことに一定の効果があつたと言える。

加えて、「見方・考え方を働かせる問い」の記述からも生徒が「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を身に付けることができたことを見取ることができた。以下は生徒Aが第5時に記述した「見方・考え方を働かせる問い」への記述である。

- (前略) 国民全体が関わる経済の崩壊の影響が強いです。なぜそう思ったのかというと、平安時代の時は国司による過重な税による国民への重い負担、現代は金権政治の実態が明らかとなり、汚職事件が発覚し、国民の非難を浴びました。その結果政権が交代しました。この2つの時代に共通するのは経済の崩壊とそれに不満を持つ国民ということから、そう考えました。

生徒Aは第1時に政権の移り変わりの要因を考察した際、「国民の政治への思想が変わった時」という抽象的な意見を挙げた。しかし、第5時の再考察では、経済の乱れや社会不安、国民の不満など多くの視点を取り入れ、具体的に表現していた。また、平安時代の政権の移り変わる推移と現代の政権交代の推移を比較し、共通点を見いだすなど、単元で学んだ知識を活用し、歴史的な見方・考え方を働かせている様子を見ること

ができた。

おわりに

研究のまとめ

1 研究の成果

検証の結果から、「単元の見通しを表現・修正する活動」を通して、情報や知識を歴史的な見方・考え方を働かせて活用する生徒の様子を確認できた。すなわち、「歴史的な変化を因果的に理由付ける力」を生徒に育むことに一定の成果が得られたと考えられる。

本研究は生徒が問いを表現するための前段階として、学習する単元を見通す実践であった。「単元の見通しを表現・修正する活動」の単元計画は、令和4年度から設置される「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」の授業実践としても活用できると考えられる。

2 研究の課題と今後の展望

(1) 情報や知識を収集するための技能を育む

今回の実践では情報や知識を活用することに焦点を当てた。しかし、第1時に行った、資料から様々な情報を収集する活動において、内容を抜き出すだけで終わってしまい、その背景を読み取れていない生徒が多く見られた。結果、「単元の見通し」を表現するための情報を十分に集められず、第3図で示したように、歴史的な見方・考え方に着目できなかった生徒が多かったと考えられる。このことから、本実践の効果をより高めるため、生徒に情報や知識を収集する技能を育むことが必要であると考えられる。情報や知識を収集する技能を育むための生徒の具体的な活動としては、同様の事象に対して異なった視点から書かれた資料を読み比べるなど、資料の意義を読み取る活動が考えられる。

(2) 手立ての発展性

本実践を通して、生徒が単元を見通すための手立てを示すことはできたが、新学習指導要領では生徒が「問いを表現する」ことが求められている。しかし、いきなり問いを表現させることは生徒、教員双方にとって容易ではない。本実践で示した「単元の見通しを表現・修正する活動」を継続し、情報や知識を収集するための技能も合わせて育むことで、歴史的な見方・考え方を働かせて思考を行うことの習慣化を促すことができ、生徒が問いを表現できるようになっていくと考えられる。

新学習指導要領の実施に伴い、生徒が問いを表現できるようになるための段階を工夫した単元計画、更には年間を通しての指導計画が必要となる。情報、知識を活用し、新たな考えを生み出せる生徒の育成ができるよう、教員も生徒への指導に見通しをもちながら日々の授業に取り組んでいく必要がある。

情報化の進展により、単純作業はA Iが代替する未来が迫っている中で、情報や知識を新たな価値につなげていく人材を育成する必要がある。膨大な情報、知識を用いる地理歴史科は、複雑な情報、知識の活用方法を授業で展開できる可能性を秘める教科と考えられる。

本研究は、生徒が情報や知識を活用し、新たな考えをもち、根拠を示して説明する力の育成を目指した。検証授業では見通しを表現・修正する活動を通して、情報や知識を活用し、単元の問いを解決しようとする生徒の姿を見ることができた。今回の成果と課題を多くの教員と共有し、今後より一層授業改善に貢献できるよう取り組んでいきたい。

最後に本研究を進めるに当たり、多大な御協力をいただいた秦野曾屋高等学校の皆様へ深く感謝を申し上げます、結びとしたい。

引用文献

- 国立教育政策研究所 2019 「OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査(PISA2018)のポイント」
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf (2020年12月17日取得)
- 文部科学省 2019a 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』東洋館出版社
- 文部科学省 2019b 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編』東洋館出版社 p.126
- 文部科学省 2020 「社会科、地理歴史科、公民科の指導におけるICTの活用について」
https://www.mext.go.jp/content/20201110-mxt_jogai01-000010146_002.pdf (2020年12月17日取得)
- 白井秀明・石上靖芳 2018 「小学校社会科における『歴史的思考力』を育成する単元開発と評価方法に関する実践研究－『社会的な見方・考え方』に焦点をあてて－」(静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第50号) p.41

参考文献

- 池尻良平・山内祐平 2012 「歴史的思考力の分類と効果的な育成方法」(日本教育工学会第28回全国大会講演論文集)
- 市川伸一 2001 『学ぶ意欲の心理学』PHP新書
- 皆川雅樹 2019 「歴史を『教える』『学ぶ』－歴史教育のナワバリへの挑戦－」(『歴史教育「再」入門 歴史総合・日本史探究・世界史探究への“挑戦”』清水書院)